越境精神

梅棹忠夫の残したもの　4

小長谷　有紀

ローマ字運動

世界と等しくつながるには

地震や津波などの1次災害に、火災や事故といった2次的人災が加わり、3次災害が続く。何を3次とみるかは人によって違うが、わたしは情報発信のあり方を問うておきたい。

とりわけ、原発事故や放射能汚染に関する当事者からの発表は、当初、遅めかつ控えめを原則にしているとしか思えない内容であり、それゆえに多くの人びとが「大本営発表」という言葉を思い浮かべたほどだった。

パニックにならないようにというご配慮は、知らしむべからずというご沙汰に等しい。真実から遠ざけられ操作されるという被害から、わたしたちは自力で遠ざかるしかない。

幸いにして、戦時中と異なり、現在は海外からの発信を含めて多様な情報が提供されている。例えば、東北新幹線の被曝量について実施された5月3日の日米合同調査の結果は、米国エネルギー省から公開され、有志によって邦訳されている。市民の力で世界が等しくつながり、新たな情報提供のネットワークが生まれているのである。

いまから半世紀以上も前のこと、梅棹忠夫は世界と等しくつながるために、ローマ字運動とエスペラント語運動に没頭した。いずれも戦後のラジカルな文化運動の一種であった。

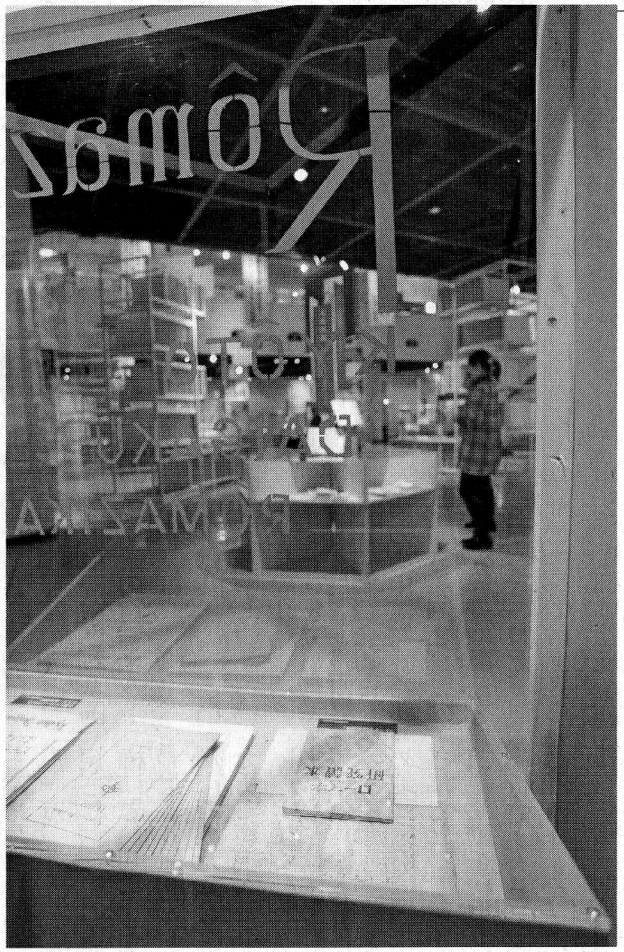
ローマ字ならば、母語として日本語を維持しつつ、タイプライターで打って国際的な普遍性を獲得できる、と梅棹は期待した。一方、エスペラント語は国際語として考案された人工言語である。「数において優勢をほこる、ほんのひとにぎりの言語群によって、小言語をかたる人たちが、抑圧され、排除されるという現実を容認することは、たえがたいことである」と述べているように、梅棹は英語による寡占状態を阻止しようと努めたのだった。

すでにパソコンやワープロが普及し、日本語はもはや機械化されている。しかし、世界中で日本語を学ぶ人びとが漢字変換ソフトを持っているとは限らない。だから、今なおローマ字書きは、世界中で日本語が愛されるための第一歩ではありうる。

そして実は日本語に限らず、あらゆる言語にとって、ローマ字書きすることによって、インターネットに乗り、国境を超え、市民力をはぐくむ源泉となるのである。チュニジアのジャスミン革命は、アラビア語圏においてネット上の連帯が生じたことを証明した、とされる。

真実にみずから近づき、世界と等しくつながる方法は、求めればすでに存在している。

（国立民族学博物館教授）



ウメサオタダオ展の「知的生産」のコーナーにある「ローマ字運動」関係資料＝大阪府吹田市の国立民族学博物館